

第一次全国文学芸術工作者代表大会の準備について

辻 田 正 雄

〔抄 録〕

第一次文代会は新政治協商会議の文芸界代表を選出するために、建国以前に開催される必要があった。これは統一戦線を考慮したものであったが、同時に思想性も重視されていた。中国共産党が開催準備から深く関わり、郭沫若、茅盾、周揚らが指名されその中心的役割を担った。文代会で新中国の文芸組織、方針等が決定され、文代会の代表が新中国の文芸政策を実行する中心的存在となった。

キーワード 中国共産党 郭沫若 茅盾 周揚

1. はじめに

第一次全国文学芸術工作者代表大会（文代会）は新中国成立以前の1949年7月2日から19日まで北平で開催された。文学、演劇、映画、音楽、美術、舞踏などの代表が出席した。そのうち演劇界代表は4割を占めていた。識字率がまだそれほど高くなかった当時の中国社会において演劇活動が文芸政策のなかで特別な位置にあったためであろう。この大会で、毛沢東の文芸方針が卓越した正しいものであること、文芸は広範な人民大衆、労働者・農民・兵士と結びつくこと、人民大衆に学んでこそ人民大衆を教育することができることなどが大会宣言として採択された。この大会は実質的に中華人民共和国の文学体制の基本方針を決定する会議であった。多くの文学史の記述は文代会を当代文学の起点としている。洪子誠は次のように述べている——「第一次全国文学芸術工作者代表大会は、その後の文学史のなかで常に“当代文学”の起点とみなされてきた。この会議は40年代の解放区及び国民党統治区の文芸運動と創作を総括し批判的検討を加えた基礎の上に、延安の文学が代表する方向性を当代文学の方向であると確定した。そしてまた当代文学の創作や理論的批評や文芸運動の展開方式、方針、政策に対する規範的綱領と具体的細則を規定した」⁽¹⁾。

では、文代会はなぜ新中国成立以前に開催されたのだろうか。新中国成立以前に開催されなければならない必要性があったのだろうか。その準備はどのように進められたのだろうか。

本稿は、文代会の準備について、どのような人たちが準備を進めたのか、その人選及び準備を担当した委員会の活動を中心に、当時の記事の他、近年に出版された回想録や新出資料によって考察しようとするものである。

2. 北平解放

まず1949年初めの共産党軍の北平入城——北平解放について経過を簡単に整理してみよう。

1949年1月1日、中国人民解放軍北平市軍事管制委員会（軍管会）が成立し、葉剣英が主席となった。同時に北平市郊外にて北平市人民政府が成立した。市長に葉剣英、副市長に徐冰が就任した⁽²⁾。

1月21日、国民党軍司令官傅作義は高級軍官会議を招集し中国共産党側の和平条件を受諾して人民解放軍の北平無血入城の受け入れを宣言した⁽³⁾。

1月31日、北平の解放を宣言し、同日から2月1日にかけて軍管会は『華北日報』や北平放送局等の接管を開始した。

2月1日、人民解放軍代表と傅作義の共同による北平連合事務処が正式に成立し、葉剣英が主任となった。

2月2日、軍管会及び北平市人民政府は正式に北平城内に移り執務を行なう。『人民日報（北平版）』が創刊され新華社北平分社も成立した。また北平新華放送局が放送を開始する。

2月3日、人民解放軍は北平入城を行なう。

2月4日、葉剣英市長と徐冰副市長は旧国民党政府職員を招集し政府機構の接管を始めることを宣言した⁽⁴⁾。

この時の接管等によって新中国成立のための準備活動の拠点となったのは中南海と北京飯店である。中南海は新政治協商会議（新政協）の準備会議及び正式会議の会場となったし、北京飯店は会議に参加する代表が宿泊するなどの活動拠点となった。

中南海と北京飯店の接管は周恩来の指示で、齊燕銘がその接管の責任者であった。具体的業務の責任は、北京飯店は申伯純と金城が、中南海は周子健が務めた⁽⁵⁾。

文代会のように多くの代表が各地から参加する全国規模の会議を開催しようと思えば、会場や参加者の宿泊所の確保が必要であることは言うまでもないが、まずその準備活動のための拠点ができていなければならない。

上述のように国民党政府機関の接管のほか、中南海や北京飯店などの多くの拠点を確保することによって、多くの工作者が北平に移って活動することが可能になったのである⁽⁶⁾。

3. 文代会開催の決定

では文代会を開催することはどのようにして決定されたのだろうか。関連する会合をみてみよう。

1949年3月3日、華北人民政府文化芸術工作委員会と華北文芸界協会（華北文協）は北京飯店で文芸界茶話会を開いた。参加者は郭沫若、茅盾、周揚、沙可夫ら七十数人であった⁽⁷⁾。

華北人民政府は華北解放区の行政機構でその下に北平市人民政府等がある⁽⁸⁾。華北人民政府文化芸術工作委員会は華北解放区全体の文化行政を統轄していたものと思われる。主任は周揚、副主任は沙可夫であった。

華北文協は抗戦時期の組織の後継である。文化界の抗戦組織として中華全国文芸界抗敵協会は1938年3月、武漢にて成立し各地に分会が設けられた。抗戦勝利後、中華全国文芸界協会（全国文協）に改称された。1948年8月8日、晋察冀辺区文聯と晋冀魯豫辺区文聯は連合で文芸工作者会議を開き、両辺区の文聯を合併してここに華北文協が成立した。蕭三が主任、李伯釗が副主任に、周揚は理事に選出されている。華北文協はこの地域に集まっている文芸関係者が多く、また中央機関とも近かった。

文芸界の代表的人物は抗戦そしてそれに続く内戦によってそれまでが各地に分散した状態にあったがこの時期かなり多くの文芸工作者が北平に集まってきていた。この3月3日の茶話会によって文芸界の主要な人物が一堂に会したのである。そしてこの場で解放区や国統区での経験交流とともに当面及び今後の文芸方針が話し合われた。

周揚は華北文化芸術工作委員会主任委員として工作委員会と華北文協を代表して発言し、「解放区では文芸は自覚的に政治に従い政治を反映するものである。超政治と称するような文芸は存在しない。文芸工作者は人民大衆の生活を熟知しなければならないし、同時に共産党と人民政府の多方面にわたる政策にも通じていなければならない。この両者は不可分である」と述べ、「文芸界が一致団結して反帝、反封建、反官僚資本主義の新中国を建設するためにともに闘い、新中国の文芸事業を確立するためにともに奮闘することを希望する」と呼びかけた。

茅盾は、都市に見られるプチブル趣味に迎合した文芸に反対するよう注意しなければならない、と述べた。

郭沫若は「延安の文芸座談会以後、中国の文芸は新しい時代に入った」と指摘し、「文芸工作者は魂の設計者である。新中国のために新しい魂、新しい人間を創り出そう。今後の建設活動において文芸工作者には大きな使命があり、他の人の精神や魂に影響を与えるという任務がある。だが他人の魂に影響を与えるためには、まず自分の魂を健全にし革命的人生観を打ちたて毛沢東思想を学ばなければならない」と述べた。

田漢は、文芸界は同一の目標の下に全国統一の組織を再結成することを提案した。沙可夫が最後にこの提案が早く実現されることを希望すると述べて茶話会を締め括った。

この茶話会での発言や提案、たとえば解放区の文芸経験の重視、毛沢東思想の学習、文芸工作者の全国組織の設立等は、文代会の基本方針に繋がるものである。この茶話会で文代会の基本方針の方向性が既に決定されていたことが判る。

この茶話会を伝える『人民日報』の記事は、周揚と沙可夫に対して党員であることを示す「同志」を使用しているが、その他の人物の発言紹介は作家、劇作家、詩人等の肩書きだけで党員に対しても「同志」を使用していない。また軍関係者として葉剣英将軍もこの会合に対する祝辞を述べるために駆けつけたとして紹介している。これらはこの茶話会が広範囲にわたる分野から人物が結集し、軍からも支持されていることを示そうとするものである。

3月20日、全国文協理事・監事会議が北京飯店で開催され、解放区の華北文協が合同会議を開き新しい全国文芸界協会を準備することが決定された⁽⁹⁾。

3月22日、北平にいる全国文協総会理事・監事及び華北文協理事は北京飯店で合同会議を開き、中華全国文学芸術工作者代表大会の召集とその準備委員会設置を決定した⁽¹⁰⁾。

そして3月24日、文代会準備委員会が開かれ正式に成立を宣言した⁽¹¹⁾。

4. 準備委員会委員の選出

このように準備委員会の設置は3月3日の茶話会以後着々と進められ、3月24日に準備委員会第一回会議で委員が選出された。

では、この茶話会を設定したのは誰なのか、そして準備委員会委員はどのようにして選出されたのだろうか。

これには中国共産党が関わっていると考えられるので、次に文代会に関連する中国共産党の動きを追ってみよう。

1949年2月15日、中共中央は周揚及びその他の解放区宛に文協準備会を開催するよう通知した⁽¹²⁾。周揚は当時華北中央局宣伝部部长で北平で活動していた。この通知の重点は、新政治協商会議の開催以前に各解放区の文協の合同会議を開いて討議することを要求することにある。その内容は次の2点を中心であった。

- ①新政協に出席する文芸界の代表を推薦すること。
- ②華北解放区文協と全国文協の連名で合同会議を開いて新しい全国文協大会を準備すること。周揚がその準備責任者となって郭沫若と茅盾が北平に到着後にかれらと協議のうえ決定すること。

中共中央がこの通知を出した段階では新政協の開催は5月から6月の間が想定されており、そのため文代会は4月開催を求める内容となっている。そして2月25日に郭沫若と茅盾が北平に到着する⁽¹³⁾。

前述の3月3日の茶話会はこのような背景の下に開かれたのである。そしてこの茶話会で出さ

れた意見を参考にして、3月5日、周揚は次のような報告を打電する。

- ①華北文協は合同会議を開催してその場で新しい文協の準備委員会の設置を発議する。
- ②その準備委員会の委員は郭沫若、茅盾、田漢、洪深、曹靖華、許広平、周揚、蕭三、沙可夫の9名とし、丁玲、胡風、葉聖陶については北平到着後かれらを加える。茅盾を主任、周揚と沙可夫を副主任とする¹⁴⁾。

3月5日の打電の後、周揚は郭沫若、茅盾、田漢、洪深らと協議し、準備委員会委員の名簿を3月9日に打電する。その内容は次の通りである。

- ①許広平を削除し、徐悲鴻、賀緑汀、程硯秋、兪平伯、李広田を加えて15名とする。
- ②鄭振鐸、葉聖陶、曹禺、巴金らが北平到着後にかれらを追加して合計19名とする。
- ③そしてこのこのことについて中共中央の同意が得られれば華北文協と全国文協在北平理事の合同会議で正式決定したい。
- ④文代会は5月1日に開催し5月4日に正式に新しい文協及び新政協の文芸界代表を選出したい¹⁵⁾。

許広平がなぜ委員名簿から削除されたのかはよく判らない。許広平は3月3日の茶話会に出席して蕭軍批判を行なっている。これはその後の文代会の文芸方針の内容に沿った批判であった。そして許広平はこの後上海各団体連合会の代表として世界平和擁護大会代表団に参加している¹⁶⁾。おそらく活動の重点を文代会準備に置くことが難しいために本人が辞退したものとされる。

また文代会開催を5月1日とするのは多くの文芸界の人物の北平到着が遅れていることが主な原因であろう。文代会代表決定後も交通事情のため多くの代表がまだ到着していないとして開催延期の通知がなされている¹⁷⁾。

一方、中共中央は3月9日に周揚に羅邁(李維漢)と相談するよう打電している¹⁸⁾。これは周揚の3月5日付電報に対する返電である。

李維漢は当時中共中央統一戦線部部长であった。李維漢と相談せよという中共中央の指示は、国共内戦の軍事的勝利の後の統一戦線活動において、知名度の高い文学者たちが多数参加している全国文協の役割を重視していることを示すものである。

文協準備委員会名簿について中共中央は3月15日に周揚に打電する。その内容は次の通りである。

- ①周揚原案の19名に同意する。
- ②それ以外に袁牧之、葉浅予、趙樹理、古元ら映画や絵画の分野の代表などを加え24名とする。
- ③正副主任は郭沫若、茅盾、周揚の3名が担当する¹⁹⁾。

この後、既に述べたように3月20日の全国文協理事・監事会議の後、3月22日の在北平全国文協理事・監事及び華北文協理事の合同会議を経て、3月24日に文代会準備委員会が正式に成立し、同日に第1回会議が開催された。この会議で郭沫若、茅盾、周揚、葉聖陶、沙可夫、艾青、

第一次全国文学芸術工作者代表大会の準備について

李広田の7名が準備委員会常務委員に選出され、郭沫若が準備委員会主任、茅盾と周揚が副主任、そして沙可夫が秘書長になった。

この会議に出席した委員は37名であったが²⁰⁾、5月10日の第3回会議で夏衍と何其芳が追加され最終的に委員は42名になった²¹⁾。この人数は中共中央の3月15日付電報で言及された24名より大幅に増加している。最終決定がどこでどのようにしてなされたのかは不明であるが、できるだけ広い範囲から選出するという統一戦線の方針を意識したものであろう。

その後、おそらく6月22日に文代会党組幹事会が成立した²²⁾。文代会準備委員会委員の党員と文代会各代表用の党組の責任者の合計23名から成る。常務委員は周揚、沙可夫、丁玲、柯仲平、周文、何其芳、馮乃超の7名で秘書は陳企霞であった。そして文代会の主席団及び常務主席団は6月24日に決定された。この決定には文代会党組幹事会を通して中共中央が関与しているものと思われる。

ここで準備委員会委員を中心に関連事項を整理して一覧にしてみよう。

準備委員会関連事項関係者一覧

「3/3」は3月3日の茶話会。

「3/5」は3月5日付周揚電報の名簿。

「3/9」は3月9日付周揚電報の名簿。

「3/15」は3月15日付中共中央電報の名簿。

「3/24委」は準備委員会委員。

「3/24常」は準備委員会常務委員。

「3/25」は3月25日付人民日報で報道された3月24日会議出席者。

「6/22」は文代会党組幹事。

「文主」は文代会主席団。

「文常」は文代会常務主席団。

いずれも○印は出席または選出、

×印は不参加または名簿から削除、

△印は北平到着後選出予定、

+印は追加者（3/15）、

空欄（3/3と3/24）は不明、

備考欄の日付は3/3以後北平到着者の北平到着日、を表す。

人名 (簡体字)	3/3	3/5	3/9	3/15	3/24 委	3/24 常	3/25	6/22	文主	文常	備考
郭沫若	○	○	○		○	○	○		○	○	

茅盾	○	○	○		○	○	○		○	○	
周扬	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
叶圣陶	×	△	△		○	○	○		○		3/18
郑振铎	×		△		○		○		○	○	3/18
田汉	○	○	○		○		○		○	○	
曹靖华	○	○	○		○		○		○	○	
欧阳予倩	×			+	○				○	○	4/9
柳亚子	×				○		○		○		3/18
俞平伯	○		○		○		○		○		
徐悲鸿	○		○		○		○		○		
丁玲	×	△	○		○		○	○	○	○	6/8
柯仲平					○		○	○	○	○	
沙可夫	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
萧三		○	○		○		○	○	○		
洪深	○	○	○		○		○		○	○	
阳翰笙					○				○	○	
冯乃超					○				○		
阿英	×				○			○	○	○	5/10
吕骥					○		○	○	○		
李伯钊	○				○		○	○	○	○	
欧阳山					○		○	○	○		
艾青					○	○	○	○	○		
曹禺	×		△		○		○		○		3/18
马思聪	×				○				○		4/9
史东山					○				○		
胡风	×	△	○		○		○		○		3/26
贺绿汀			○		○		○		○		

第一次全国文学芸術工作者代表大会の準備について

程砚秋	○		○		○		○		○		
叶浅予	○			+	○		○		○		
赵树理				+	○		○	○	○		4月初
袁牧之				+	○		○	○	○		
古元				+	○		○	○	○		
于伶					○				×		
马彦祥	○				○		○		○		
刘白羽	○				○		○		×		
荒煤	○				○		○		×		
盛家伦	○				○		○		×		
宋之的	○				○		○		○		
夏衍	×				○				×		5/9?
张庚					○			○	○		
何其芳					○			○	○		
李广田	○		○		※	○	○		○		
张致祥	○							○	○	○	
巴金	×		△		×				○		6/27
许广平	○	○	×						○		
冯雪峰									○	○	
刘芝明								○	○	○	
冯至	○								○		
周文								○	○		
陈万美								○	○		
江丰								○	○		
赖少奇								○	○		

※『紀念文集』に常務委員として名前の記載はあるが、委員として名前の記載なし。印刷漏れであろう。

このなかで周揚の3月9日付電報で準備委員会委員名簿に名前が挙がっていた巴金は結局委員に選出されていない。巴金は1949年6月上旬北平から周恩来の文代会出席要請電報を受け、6月27日に文代会上海代表団（南方代表第二団）の一員として列車で上海から北平に入っている²³。それより以前に中国共産党側から何らかの接触があったと思われるがよく判らない。文代会で巴金は「私がこの大会に参加したのは発言するためではありません。学ぶために来たのです」²⁴と発言していることから、委員就任要請はもしあったとしても辞退したものと思われる。

またこの一覧から判るように準備委員会委員のほとんど全員が文代会大会主席団の一員となっている。主席団に入っていないのは夏衍ら数人であるがいずれも文代会代表には選出されている。文代会開催時に、夏衍は上海市軍管会文化接管管理委員会副主任、その後上海市委員会常務委員兼文化局局长、于伶は上海市軍管会文化接管管理委員会文芸处处长、荒煤は天津市軍管会文芸处处长でそれぞれ上海や天津での活動のため北平を離れていたし、盛家倫は文代会の演出委員会委員として会場設営を行なっている。また劉伯羽は文代会で成立した中華全国文学工作者協会全国委員会委員になっている。

このように準備委員会委員は文代会の準備から本大会において重要な役割を果たし、その後の新中国の文芸界を指導していくことになる。

次に3月24日に選出された7名の準備委員会常務委員について、抗戦時期の活動を中心にもう少し詳しくみてみよう。

郭沫若（1892-1978）は1927年に入党し左聯のメンバーであった。抗戦時期は文化工作委员会主任で1948年に解放区入りしている。

茅盾（1896-1981）は1921年に入党し左聯執行書記であった。文協理事にも選出されている。

周揚（1908-1989）は1927年に入党し左聯のメンバーであった。延安の魯迅芸術文学院（1939年秋に魯迅芸術学院を改称）のほか華北大学副校長も努めた。

葉聖陶（1894-1988）は文協総務部主任で理事でもあった。中国共産党員ではなく中国民主促進会のメンバーで中国共産党に協力した。葉聖陶の「北上日記」²⁵に拠ると、葉は中国共産党の要請を受けて新政治協商会議に出席するため1949年初上海から北平へ赴き、3月18日に北平到着後、3月20日、22日、24日と続く会議に出席している。

沙可夫（1903-1961）は1926年に入党し、延安の魯迅芸術学院初代院長で、華北局文協主任であった。

艾青（1910-1996）は文協のメンバーで1944年に入党している。華北連合大学文芸学院副院長を務めたことがあり、華北大学第三部副主任であった。1949年1月31日、艾青は華北大学の教員、学生、幹部らと人民解放軍とともに北平に入城している。艾青は人民解放軍軍事管制委員会文化接管管理委員会に派遣され、国立北平芸術専科学校（中央美術学院の前身）の軍代表の一員として活動した。北平芸術専科学校の接管活動として具体的には主に画家の生活面のめんどうをみることであった²⁶。

李広田（1906-1968）は清華大学中文系教授であった。1948年に入党している。

この7名の常務委員から郭沫若が準備委員会主任に選出されたのは、郭沫若を文化界の指導者とするという中国共産党の方針に沿ったものであろう。

1938年夏、中共中央は周恩来の提案に基づき、郭沫若を魯迅の後継者として中国革命の文化界の指導者とする党内決定を下したという⁶⁷⁾。郭沫若を準備委員会主任にすることは既定の方針であったのであろう。

ただ、郭沫若は1949年4月20日から26日までパリで開催される第1回世界平和擁護大会の中国代表団団長に選出されている⁶⁸⁾。このような事情も関係しているものと思われるが文代会の準備活動、たとえば具体的な議題に関わる事柄について事前討議などは茅盾が中心になって進められた。

準備委員会常務委員7名は葉聖陶以外は中国共産党員であるが、郭沫若と茅盾のふたりは文代会党組幹事になっていない。対外的に郭沫若と茅盾は民主人士として宣伝されたのである⁶⁹⁾。1949年7月7日に抗日戦争十二周年を記念して新政協準備会の各党派各団体が宣言を出したが、この時の肩書きも郭沫若は「無党派民主人士」、茅盾は「文化界民主人士」である⁷⁰⁾。また艾青と李広田のふたりも詩人や大学教授として知られていた。

このように郭沫若や茅盾などの文化界の著名人が民主人士として前面に出るということは、文代会が中国共産党ではなく民主人士が中心となった文芸界の大団結であることを象徴とするのに効果的なことであろう。

これは中国共産党の統一戦線の一環であり、この一連の経過はすべて中共中央の方針に沿ったものである。

かくて、郭沫若が代表として準備委員会の看板となり、茅盾が具体的活動を進め、周揚が中共中央との連絡を取り、沙可夫がその実務を担当するという任務分担がなされ、文代会の活動準備が進められていく。

5. 結語

以上述べたように文代会の開催について、準備委員会委員の人選にまで中共中央が深く関与していた。準備委員会が会合を続け文代会開催の準備を進めていくなかでも中国共産党の指示は出されている。中国共産党が文代会をそれほど重視していたということであろう。

5月13日、周恩来は中南海で座談会を開いた。テーマは新政協会議開催以前に文代会を開催すること、今後の広報活動、上海解放後の文化活動等であった。周恩来の招請により座談会に参加したのは、周揚、茅盾、袁牧之、阿英、鄭振鐸、夏衍、沙可夫などであった。座談会というのは参加者は対等という形式をとるが、実質的には招請者が参加者に指示を出すものであることが多い。この座談会のなかで周恩来は、文代会の精神や基本原則について指示を出してい

る——「今回の文代会は結集の大会であり、団結の大会である。団結する相手は多方面にわたる。多ければ多いほどよい。団結できるすべての人と団結すべきである。解放区の文芸工作者や大後方の文芸工作者と団結しなければならないだけでなく、これまで政治に関心のなかった人とも団結しなければならない。それどころかわれわれに反対した人とも団結しなければならない。かれらが現在、反共あるいは反ソでない限り彼らと団結しなければならない。かれらを差別してはいけないし、ましてやかれらを敵視してはいけない。団結が総方針である。国に留まることを願っているすべての人、国を愛するすべての人、新中国のために働こうと願っているすべての人と、団結しなければならない、かれらをわれわれの側に勝ちとらねばならない」⁹³。そして文代会のこれらの原則は周恩来個人の意見ではなく中共中央の決定であることを付け加えた⁹⁴。

この団結という総方針は、民主連合政府樹立をたてまえとする新政協会議に向けてなされたものである。新政協会議準備会は6月15日から19日まで開催され21名から成る常務委員会が設置されている。常務委員会主任に毛沢東が就き、郭沫若も5名の副主任のひとりに選出されている。また茅盾は常務委員であった⁹⁵。新政協準備会の小組に加わっている文代会準備委員会委員は、郭沫若、茅盾の他、葉聖陶、田漢、洪深、鄭振鐸、歐陽予倩らであった。そのほかに周揚の3月5日付電報で名前が挙がっていた許広平が共同綱領起草小組のメンバーとして加わっている。また、新政協文芸界代表の人数が15名であることも決定された⁹⁶。新政協会議は9月21日に開幕し30日に閉幕する。

第一次文代会は1949年7月に開催された。民主連合政府の新中国（当初、中華人民民主共和国の国号が予定されていた）を樹立するために新政治協商会議を開催する必要があったが、文芸界はその会議の母体となる召集単位のひとつであった。文芸界の代表を選出するために文代会は建国以前というより新政協会議開催以前に開催されなければならなかったのである。これは広範な人が参加する統一戦線のために必要なことであったが、同時にイデオロギーも重視されていた。中国共産党が文代会開催準備から深く関わり、郭沫若、茅盾、周揚らが中国共産党によって指名されてその中心的役割を担った。文代会で新中国の文芸組織、方針等が決定され、文代会の代表が新中国の文芸政策を実行する中心的存在となった。

【注釈】

- (1) 洪子誠《中国当代文学史（修订版）》，北京大学出版社，2007年6月，P.15。
- (2) 北平解放とその後の政治状況については主として下記に拠った。
 - ① 《中国共产党编年史》编委会编《中国共产党编年史》第4卷，山西人民出版社，2002年10月。
 - ② 赵庚奇编著《北京解放三十五年大事记》，北京日报出版社，1986年3月。
- (3) 本刊特约记者《派傅冬菊做傅作义的工作——王汉斌细说北平和平解放》《百年潮》2011年第1期。
- (4) (新华社北平电)《北平市人民政府开始接管政权机构》《人民日报》1949年2月9日。

その後、2月20日に華北人民政府は北平に移る。3月5日から13日まで河北省平山県西柏坡村で中国共産党第7期二中全会が開催され、反動分子が参加しない新政治協商会議の招集及び民主連合政

第一次全国文学芸術工作者代表大会の準備について

- 府の樹立が提案され採択される。そして中共中央と人民解放軍総部は3月25日に北平に移る。
- (5) 夏杰口述、龚喜跃整理《接收中南海亲历史》《百年潮》2010年第11期。
- (6) その他文代会開催準備拠点となった主なところは次の通りである。() 内に依拠資料を記す。
- 東北大学 (《华北大学迁平》《人民日报》1949年4月7日)
- 北京大学四院 (注 (2) ②1949年2月4日の条)
- 中国旅行社 (《文艺工作者代表会筹备会常委开会》《人民日报》1949年4月16日)
- 北平芸術専科学学校 (《文艺报》创刊号)
- 永安飯店 (《文化工作者黄药眠等抵平》《人民日报》1949年5月19日)
- 留香飯店 (《出席全国文代会南方第二代表团抵平》《人民日报》1949年6月27日)
- 御河橋二号旧日本大使館 (何季民《“第一次文代会”的几个人和事》《博览群书》2009年第1期, P.119)
- 曹福林公館 (王海波编选《阿英日记》, 山西教育出版社, 1997年11月, 1949年4月25日の条。また、阿英遺稿、吴泰昌注释《第一次文代会日记》《新文学史料》第1辑 [1978年])
- (7) 《全国文艺界昨空前盛会》《人民日报 (北平版)》1949年3月4日。この記事と (新华社电) 《华北文艺界在平举行茶话会》《人民日报》1949年3月11日はほぼ同内容である。以下の茶話会での発言の引用は《人民日报(北平版)》に拠る。
- (8) 《华北解放区行政区划》《人民日报》1949年3月18日。
- (9) 斯炎伟《全国第一次文代会与新中国文学体制的建构》, 人民文学出版社, 2008年10月, P.231。
また陈福康编著《郑振铎年谱》, 书目文献出版社, 1988年3月, P.432を参照。
- (10) 文代会の準備について、中华全国文学艺术工作者代表大会宣传处编《中华全国文学艺术工作者代表大会纪念文集》, 新华书店, 1950年3月 (以下《纪念文集》と略記する) 所収の《大会筹备经过》に記述があるが、3月3日の茶話会に触れていない。そして3月22日に茶話会が開かれこの場で郭沫若の提案によって代表大会召集が提案されたと記すが、疑問が残る。『人民日报』等の記述に従う。
- (11) 金凤《重建全国文艺组织将召开 全国文艺界代表大会推选郭沫若等为筹备委员》《人民日报》1949年3月25日。
- (12) 《中共中央关于召开文协筹备会的通知 (1949年2月15日)》《中共党史资料》第84辑 (2002年12月)。
この檔案資料から中国文聯の成立を考察した論考に下記があり、本稿はこの論考から多くの教示を得た。
○白焯《主旨、主将与主脉》《2009 中国文坛纪事》(人民文学出版社, 2010年4月), 原載は《北京文学》2009年第9期。
- (13) 龚继民、方仁念《郭沫若年谱》(中), 天津人民出版社, 1992年10月, P.758; 及び万树玉《茅盾年谱》, 浙江文艺出版社, 1986年10月, P.351, を参照。
- (14) 《周扬关于全国新文协筹备名单致中央及陆定一电 (1949年3月5日)》《中共党史资料》第84辑。
- (15) 《周扬关于华北文协筹委人选问题致中央及陆定一电 (1949年3月9日)》《中共党史资料》第84辑。
この3月9日の周揚電報は電報の原文に〈华北文协筹委人选问题〉とあるが、内容は新しい全国文協の準備委員会委員の人選について述べたものである。
- (16) 《出席巴黎和平大会中国代表团已正式组成》《人民日报》1949年3月27日。
- (17) 《文艺动态》《文艺报》第4期 [1949年5月26日]。
- (18) 《中央关于全国新文协筹委会问题致周扬电(1949年3月9日)》《中共党史资料》第84辑。
- (19) 《中央关于文协筹委会名单等致周扬电(1949年3月15日)》《中共党史资料》第84辑。
- (20) 金凤《重建全国文艺组织将召开 全国文艺界代表大会推选郭沫若等为筹备委员》《人民日报》1949年3月25日。この記事で名前の記載があるのは31名である。
また斯炎伟《全国第一次文代会与新中国文学体制的建构》所収《中华全国文学艺术工作者代表大会纪事》1949年3月24日の条で準備委員会委員として40名の名前が挙げられている。
- (21) 《中华全国文学艺术工作者代表大会筹备会于5月10日举行第3次会议》《人民日报》1949年5月10日。及び、许悦《文代筹委近况》《文艺报》第2期 [1949年5月12日]。

- (22)《文艺代表大会党组给中央的报告(1949年6月22日)》《有关第一次全国文代会的一组档案》(《中共党史资料》第84辑所収)。文代会党组幹事会が成立した正確な日付は不明であるが、成立直後にこの報告がなされたと考えられるので、6月22日に成立した可能性が大きい。
- (23)唐金海、张晓云《巴金年谱》，四川文艺出版社，1989年10月，P.704。また，《出席全国文代会南方第二代表团抵平》《人民日报》1949年6月27日を参照。
- (24)巴金《我是来学习的》(《纪念文集》P.392)。
- (25)乐齐编《叶圣陶日记》，山西教育出版社，1998年1月，所収。
- (26)周红兴《艾青传》，作家出版社，1993年12月，P.357。
- (27)吴奚如《郭沫若同志和党的关系》《新文学史料》1980年第2期[5月]。また、周恩来は1941年11月16日付《新华日报》の社説として《我要说的话》を発表し郭沫若の誕生日を祝い「魯迅は新文化運動の指導者であり，郭沫若は新文化運動の主将である」と述べたという。阳翰生《回忆郭老创作二十五周年纪念和五十寿辰的庆祝活动》《新文学史料》1980年第2期に拠る。その他，艾克思編《延安文艺运动纪盛》文化艺术出版社，1987年1月，P.292-P.293を参照。
- (28)中国代表团が正式に結成されるのは1949年3月24日である。この代表团に加わっている文芸界代表のなかで文代会準備委員会委員は郭沫若のほか鄭振鐸，田漢，洪深，曹禺，蕭三，曹靖華，趙樹理，古元，徐悲鴻，程硯秋である。《出席巴黎和平大会中国代表团已正式组成》《人民日报》1949年3月27日を参照。
- また、郭沫若ら中国代表团は3月29日に巴里に向け出発しモスクワを経て4月17日にプラハに到着する。中国代表团はフランス政府から入国許可が得られずプラハの会議に参加することになる。帰途モスクワを経て北平到着は5月25日である。龚继民、方仁念《郭沫若年谱》(中)P.761-P.766を参照。
- (29)たとえば《新来解放区民主人士柳亚子等昨抵平》《人民日报》1949年3月19日は、葉聖陶らとともに郭沫若を民主人士として扱っている。
- (30)《新政治协商会议筹备会各党派各团体为纪念“七七”抗日战争十二周年宣言》《人民日报》1949年7月7日。
- (31)中共中央文献研究室編《周恩来年谱(一八九八—一九四九)》，中央文献出版社，人民出版社，1989年3月第1版，1989年9月第1次印刷，P.826。
- (32)夏衍《从香港回到上海》《人民文学》1986年第1期。但し，夏衍の伝える周恩来のことばのこの「中共中央の決定である」という部分は《周恩来年谱》には記されていない。
- (33)《准备召开新政协会议成立民主联合政府 新政协筹备会在平成立》《人民日报》1949年6月20日。
- (34)《关于新政治协商会议筹备会的一组文献》《中共党史资料》第106辑[2008年6月]。

〔付記〕

本稿は、平成23年度佛教大学一般研修の成果の一部である。

(つじた まさお 中国学科)

2011年11月4日受理